

新約聖書 マタイによる福音書 17章1節—9節（新共同訳）

¹六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。²イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなつた。³見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合つていた。⁴ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」⁵ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆つた。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。⁶弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。⁷イエスは近づき、彼らに手を触れて言つた。「起きなさい。恐れることはない。」⁸彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかつた。⁹一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「変容」

「神の顕現」という言葉があります。神の顕現とは、目に見える何らかの形で、神が人の前に現れる出来事のことです。

本日の福音書には、高い山の上で、主イエスの姿が変わる、すなわち主の変容（へんよう）が起こり、イエスが自らの栄光の姿を三人の弟子たちに示した、神の顕現の出来事が記されています。

イエスはペトロ、ヤコブ、その兄弟ヨハネの三人の弟子だけを連れて「高い山」に登ります（マタイ17:1）。弟子たちの目の前で、イエスの姿が変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなりました（マタイ17:2）。それは溢れ出る神の栄光の輝きであり、天の国を映し出す神の愛の輝きです。その光景は、天の国と、イエスの十字架と復活を先取りするものでした。

イエスが、ひととき変容して栄光の姿を弟子たちに示したことは、弟子たちの心を靈的に強めたことでしょう。たとえ、のちのイエスの十字架において弟子たちがつまずいても、やがて弟子たちはイエスのこの栄光の変容を思い起こし、主イエス・キリストを信じたことでしょう。

イエスの姿が変わると、モーセとエリヤという人物が現れ、イエスと語り合います（マタイ17:3）。モーセは旧約聖書の律法を代表し、エリヤは預言者を代表します。この二人は、旧約聖書全体を代表してここに登場しています。この場面のモーセとエリヤは、天上の世界を象徴しています。

神の栄光にあふれ、光輝くイエスがモーセとエリヤと語り合う、その信じられないような光景を見て圧倒された弟子のペトロはこう言います。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」（マタイ 17:4）。そしてペトロは、イエスとモーセとエリヤのために仮小屋を三つ建てましょうと提案します（マタイ 17:4）。このペトロの発言は、的外れなものでした。ペトロは、山の上に仮小屋を建てて、天上の者たちを留めておきたかったのです。

仮小屋を建てようとするペトロの動機は、この素晴らしさをもっと保ちたいということでしょう。私たち人間には、素晴らしいものをそのままいつまでも取っておきたい、保存しておきたいという欲求があると思います。それを代弁したのが、ペトロのこの申し出だと言えるでしょう。

しかし、そのペトロの提案がかき消されていくかのように、輝く雲が彼らを覆います（マタイ 17:5）。

そして神が、光輝く雲の中から声を発し、イエスが神の子であると宣言します。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」（マタイ 17:5）。

神は、この言葉において、モーセでもエリヤでもなくイエスだけに注目しています。モーセとエリヤについてはもはや語られません。神の声を聞いた弟子たちは、恐れから地面にひれ伏します（マタイ 17:6）。

神との出会いに驚愕してひれ伏している弟子たちに、元の姿に戻ったイエスが近づきました。イエスは彼らに手を触れて言葉をかけ、彼らから不安を取り除きます。そのときのイエスは、天的な姿に変容した栄光のイエスではなく、普通の人間の姿のイエスでした。モーセとエリヤは、もうそこにはいませんでした（マタイ 17:8）。

山から下りるとき、イエスは弟子たちにこう命じます。「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」。イエスが変容によって示した栄光は、十字架にかかる殺されるイエスの復活の栄光です。しかし人々は、十字架という受難から目をそらし、ただ栄光のみを仰ぎたがるでしょう。もし、イエスの変容の出来事が十字架を抜きにして語られれば、栄光に輝く救い主を待望している人々に大きな誤解を抱かせる危険があったでしょう。光輝く姿に変容し、モーセとエリヤと語り合っていたイエスを、この世的な救世主として人々がかつぎ出すことを避けるために、今見たことはご自分の復活の日まで口外してはならないとイエスは言ったのです（マタイ 17:9）。

この山上での出来事の後、イエスは三人の弟子たちを連れて下山しました（マタイ 17:9）。イエスが歩む道は受難の道、十字架の道です。苦しむ人、差別された人と共に歩む道であり、人々から激しい非難を浴びる道です。三人の弟子は、イエスの栄光の姿を垣間見ることが許され、イエスに従って歩むようにと招かれました。しかし、イエスが捕らえられたとき、皆怖くなって逃げてしまいました（マタイ 26:56）。弟子たちがこの出来事の意味を完全に理解できたのは、十字架の死から復活したイエスに出会った後だったのです。

新約聖書のガラテヤ書 2 章 19 節－20 節において、使徒パウロはこう述べています。「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ 2:19-20）。

私たちは、この世に生まれ、この人生の道のりを歩んで行く中で、身体的苦痛や精神的苦痛などによって、もう生きていくのが辛いと思えることがあるかもしれません。

しかし、生きることが辛いと感じるこの肉体の内に、キリストが生きて働かれていることを思えば、生きる希望が満ちてくるのではないかでしょうか。

あなたの内に生きるキリストは、山上で変容した、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなったキリストであり、十字架のキリストです。

あなたの内に生きるキリストは、栄光のキリストだけでもなければ、十字架の受難のキリストだけでもありません。

栄光と受難がひとつとなって、愛と祝福に満ちて光輝く主イエス・キリストが、いつもあなたと共にいます。

私たちは、どんな苦しみや困難の中にいる時も、主イエス・キリストと共に、心に希望のともし火をともし続け、神のゆるしと愛のうちに、この地上での時を喜びましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。あなたは、受難のイエスを示す前に、栄光のイエスをお示しくださいました。私たちが日々の生活で、御子イエスの声を聞き、歩いていくことができますように。主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 出エジプト記 24章12節—18節（新共同訳）

¹² 主が、「わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。わたしは、彼らを教えるために、教えと戒めを記した石の板をあなたに授ける」とモーセに言われると、¹³ モーセは従者ヨシュアと共に立ち上がった。モーセは、神の山へ登って行くとき、¹⁴ 長老たちに言った。「わたしたちがあなたたちのもとに帰って来るまで、ここにとどまっているなさい。見よ、アロンとフルとがあなたたちと共にいる。何か訴えのある者は、彼らのところに行きなさい。」

¹⁵ モーセが山に登って行くと、雲は山を覆った。¹⁶ 主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間、山を覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた。¹⁷ 主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂で燃える火のように見えた。¹⁸ モーセは雲の中に入って行き、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた。

新約聖書 ペトロの手紙 二1章16節—21節（新共同訳）

¹⁶ わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。¹⁷ 莊厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があって、主イエスは父である神から讃れと栄光をお受けになりました。¹⁸ わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです。¹⁹ こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意していくください。²⁰ 何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないということです。²¹ なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。

教会讃美歌 190番「主のみ名によりて」、172番「つくりぬしを」、320番「しあわせなことよ」。